

亞爾然丁時報

文藝附錄

第六卷

第四十五號

El "Argentin Djiyo"

JULIO 4 de 1931

# 恋をする不具者

ドン・ファン

六月も最早や終りに近かつた。ラブラタ河へ直角にまっただコリエンテス街は乾き切つた冷い風が、避けて様もふい行人の眞正面から容赦なく冬を吹きつけた。

それでも夜になつたこの大通りはいつもの様に賑わで賑わかなンブレトドモスや豪奢な毛皮の襟巻を唯一の楯にした皆が皆モスコウ遠征軍の如く勇敢に行進を續けてゐた。

それ程都会人にとつて夜の魅力は力強かつた。そして彼も――

だが彼の足はこの賑やかな都大路を歩いてゐても人並みはすれて大きな彼の踵は何等の興味もつかれはしなかつた。彼はたつた今街角で出会つたフロラに対する考へで一杯だつたのだ。

「あなたは本当にお氣の毒な方だわ。」と、彼は去つて貰ひたかつた。

けれど、そんな事は僕病を癖に自尊心の強い彼にとつて到底望み得られぬ事だつたので、其の埋合せにいっしがつい、然し悲しい想像にいたつてゐた。

「あなたは本当にお氣の毒な方だわ。」フロラの唇から洩れたであらう此の言葉はフロラのやうに番高く思はれた。彼はそれで満足だつた。

そして彼の出る程、幸福な心持がした。彼は縁度かこの光景を繰返した。

ラブラタ河から吹きつける寒風さへ、この幸福の彼の想像を妨げる事は出来なかつた。

彼の周囲にネクシサインが、せわしく瞬いて、人と包んだンブレトドモス皮が擦り切れる程、すし詰めに押し合つて歩いて、その人波を押しわけける様に、山のアウトの流れが徐行して――

彼はそんな如に押されながら歩いてゐる自分をすっかり忘れてゐた。

――と突然、何か柔かいものにつまづいたと思ふと、忽ち足許で悲鳴が起つた。

小さな女の子の倒れる姿が、瞬間に甘い想像を打ち切つて彼を飛び上げさせた。

「氣を付けて。」と、父親らしいが、ついに大男が抱き起しながら夢中で悲鳴をつた。

「マミウミ」

彼は、意味もなさない言葉を矢つぎ早やに口走りながら「ゴッゴ」頭を下した。

如何に入込みであるとは去へ、ばんやりしてゐるけれど、この子につまづく苦はなかつた。その原因が柄にもない赤へで、夢中になつて居た爲のだと思ふと、自分ながら同様な感に堪へない。

天下の大道を歩いて、滴歩し得るものは、足の健全なものである。恋の出るものは、健康なものではない。

不具な彼は、そのどちらをもする資格がない筈だ。さう思ふと恥かしの爲めに彼の頬は、西耳から

頭の中まで赤くなるのを覚えた。あまり西遊記のうまくない彼は、せきせき程言葉がはずに唯「ヨヨ／＼」頭をさげるだけだ。父親らしい大男は、最早何も言はずにさつたが、本具の彼の奇怪な姿に非難の眼を注いで「ジーン」と睨んでゐた。同時に、周囲の人達がうも同じ非難の視線を彼は感じた。「ハハハハ……」さういふた喘ぎも、ほせよつた彼の耳に非常な威嚇的の言葉として響いた。早くここから逃げたいと彼は思った。そして子供も大した事もなく、又大男もそれ以上何も言はないので、今一度とつたつたやうに「ヨヨ／＼」と頭を下げた彼は、逃げる様に入込みの中へ紛れこんだ。彼は早くこの場を去りたい一心で、足早々に反対の歩道にうつつても来た道を走り初めた。やがて、はげしい彼の心が、後分平靜にさへつた頃、本具の傍の明るい電燈のついた「トルテリ」の店先きに立つてゐる女に気がついた。フロラだ。彼はすぐさう思った。さつき街角で会つたはりの女が、又そこにゐたのだ。彼の心臓は、又別の意味で高鳴り初めた。今迄一度だつて真正面に彼女の顔を凝視する。この出来なかつた程、病を彼だつた。心の中では貪る様に、その人の姿を描いてゐる。もう一度とつた、今度は太陽の面を向ける時の様に、あまりまぶしくて見る事の出来なかつた彼だつた。然し、今は誰ははる事なく、その姿を見る機会

が與へられてゐるのだ。この雅當に粉れてこの夜の華を道して——何人も彼の行動に目をつけやうとさういふ。又あの人も、いふもの不具者から穴のあく程凝視されてゐる事に気が付きはしまい。気が付かないから、彼へ視線を向けて、彼をまぶしがらす心配もないのだ。彼は日頃の慾望を、充す機会を得て雀躍した。彼は思はず歩調を緩めて、明るい店先の電燈にシルエットの如く停まつた女の姿へ目をつけた。フロラは、真紅に熱れたマンサーナを紙に包んで賣つて賣り子から受けとつてゐた。黒づくめの服が、スラリとした体によくあつて、無難作ではあるが、全体として何となくおかし難い気品が滲つてゐる様に、彼は思はれた。彼には、おかしやうもななく、機嫌いである。彼女はおつとりとして、しかも賢さうだつた。イタリアーの父親とフランセーサの母親の両方から善いだけ受けつたんだと彼は思った。彼は貪るやうにその顔を見た。たとへば、妙問でも長くこの機会を確保つてゐたので、全身の熱を眼の一点に集中させて、焦さうな様に凝視した。やがてフロラは店を出た。ムチシマシマシマ、カーハのおかみを送る。御愛想を後にして、彼女は歩きあとから宿なし犬の如く「さく／＼」歩いて行く。彼は改、自分と彼女の差を考へて見た。お伽噺のお姫様の様に美しいフロラと、土蜘蛛の様

に離れ自分との間には、ラ・フラタ河より、もつとく  
 広い距離があると思つた時、彼はひどく驚愕にむ  
 つた。だが、彼はいつものやうに、又自分を諦めなければな  
 らない。  
 そして先へ行くフロラと、あとから行く彼の距離は、  
 羊比級数に段々遠ざかつていった。  
 一度、今の彼の心を肯定するかの如く……  
 彼は今一度、女のうしろ姿を見やうと思つて、人波  
 の中へ目と立ちさせた。然し、もうフロラの影は見  
 当らなかつた。  
 彼は本当に悲しがつた。  
 そして、彼女と離れずに行くマンサナの包みと思つ  
 て見た。  
 マンサナは、フロラの美しい手に抱かれて、やがて彼  
 女の可愛い紅唇に、接吻けられるであらう。  
 マンサナになりたし……  
 心からさう思つた時、彼の眼からホロ／＼と涙が、  
 冷いベレーダの上へこぼれた。

(終)

短歌

秋若き乙女と知りつへんに  
 老ぬゆと云へるそのいつわりや

詩

わが悩え

秋嶺

君を見たとき、幻よ  
 うびしき恋は冬枯れ  
 せつに逢ふ瀬は雨の中  
 君はみ屋よ空の上  
 パナリまた、く群には  
 ほろり蒸路よ、幻よ

君の声音はお姫様  
 そろり流れて胸に来る  
 恋に聞く胸早鐘よ  
 儚なき恋と知りつへも  
 古葉へ帯へる小鳥見て  
 涙ほろりと胸に散る  
 君を見たとき、幻よ  
 空のみ屋は冬枯れた  
 流れた涙冬枯れた

冬の月

秋嶺

なみ空の真中に  
 金色輝くお月様

冬の寒さによるへてる

夜の女王様お月様  
星のお姫様お供して  
御の真上に懸つてゐる

愛んだみ窓のお月様  
寒レ今宵はゆらゆらと  
お供のお星と踊つてる

暖かッはいたお月様  
雲にぐくれてこつそりと  
甘レお酒に酔つてゐる

秀

六十一

イサ公

踊り場と出るく  
とこがで時計サ四時と打つた。  
夜明けのペンペロサ

森らしい船の警笛とはこんでくる……  
外は雪で一鉢だ。  
街燈サボンマリひろげつて  
ベルにおはれた

桃色の乳芽だ。  
こま〜と歩んでゆく  
私の姿は霧の中へ  
吸ひ込まれて行つた

母

蘇南

お母様  
私の可愛いお母様  
私の大好きなお母様  
なせ早く死んだの  
私……独りぼっちに淋しいのです

お母様  
私の可愛いお母様  
私は生活に疲れたの  
なせ私を呼ばないの  
なせ私はお供が出来ないのです

お母様  
私の可愛いお母様  
なせ私を独りにしたの  
あ〜私、私はもういや  
お母様なせ私の側にはないの

お母様の可愛い私は  
お母様のお側に行きたいの

三二六二七



# 民謡をたづねて

日本の民謡には二つの大きな流派がある。一つは高京の中から出た淡路やアルプスの歌や北日本から生れた歌、これらには吹き出す様どころがある。共にどこかに暗い重々しさがあり、一方太平洋岸の歌はどこか南国的で深さはないにしても如何にも明るい気分がある。

日本人の生活の中に随分根強く喰いつた民謡の一つに追分がある。この追分は昔、中仙道と北陸街道との分れ路にあつた。追分は昔、中仙道と北陸街道山麓の宿場である。追分、皆掛、軽井沢あたりから喰はれ出したものである。南は東京から東海道すぢ遠く八丈島まで行つてゐるし、北は津軽を越えてアイヌの住む北海道迄行つてゐる。これを喰ひ出したのは高京の中に住む信州人の冥想と元氣と飘逸とだつた。

小諸出で見りや淡間の嶽  
けりも三すぢの煙たつ  
西は追分東は関所  
せめて峠の茶屋までも  
唯水峠の権見さまは  
わしづ藤のには守り神  
送りませう茶屋までも  
舟のついで茶屋までも  
上国のらぶらぶとさし〜と聲にせまつてくる。

北アルプスのふもと安曇地方には有名な

信州権藤の新そばより  
私しやあふたのそばより  
こいふのがある。信州人は故郷を出てもエスカモなく喰つたおそばの味が忘れられないうと云ふのもあながち無理ではないと思ふ。  
伊那の溪谷には伊那節があり、木曾の山中には木曾節がある。  
木曾の御嶽夏でもさむい  
持たせてやりたい足袋添へて

追分は隣國の越後へ入つてもよく喰はれた

傘を手に持ち  
どなたもさらば  
エカイお世話に  
なりました  
ひと私のすきな唄の一つである。  
水の都と云はれる新潟にはどの町にも榊があり、榊の下を出れば榊があり、川があり、杉の大木と男の子の育たぬといはれる新潟は美へと共に優美な町だ。その名物がオケサ節である。  
来いゆたとして  
行かりよ佐渡へ  
佐渡は田十九里波の上  
一代の文豪尾崎紅葉がこの唄に感心して、佐渡を打つたしつたと云ふことである。またこの唄を「波うた」としてコロチユラン・ソラノの岡屋敏子やツイタリーのレコードに吹きこんでゐる。  
来いよと来いよと八声  
まのでおいてと歌のこゑ

かくしてステウ節は波のうへの低渡にも移つた。  
 佐渡の三崎の四所御所  
 板は越後に葉は能登に  
 これは内地から渡つた女座が小水町のお寺にあ  
 る順徳院お手植のさくらが咲く頃、政卿の越後海  
 岸を見渡して唄ふ歌だ。しかし越後でもつと有  
 名なのは米山甚句である。

行かうッ参らんしやうが  
 一ツは身の爲のササ主の爲  
 主のためなら米山さまへ  
 はだし参りしとやせぬ  
 この米山甚句は延びて名古屋の方へ行けば相  
 馬塚谷と東北の方へ行つてゐる。(M.仁科)

反  
 議  
 はたちの頃

富見子

昔思へは  
 したはしい  
 悲しい涙が  
 泳れます  
 好きで男の  
 たのにまで  
 母にもすねた  
 はたちごろ

今日今頃は  
 そのころと  
 思ひ浮べて  
 泣くむ。

出 船

M.仁科

白い汽船が  
 みるみのみさる  
 廻りや別れの  
 汽笛ふく  
 涙ふいても  
 せのびやしても  
 あはしい煙と  
 波はかり  
 きつて窓から  
 こちらと眺め  
 のこり杯しう  
 ゆかれませう  
 岬まがれは  
 大西洋  
 さらけゆきます  
 君が船。

同人消息

▲六月廿二日、江見利天氏故里へ向けて南米の巴里をおさらば。大和撫子のエレキですと本人語る。あつられた同人、波瑠場を去る前、「梅子さん」となる。サントス丸ボートで放屁一発。一杯きこしのしたイサ公氏。〇〇ホールで男の便所と女の便所を取りちぎへて入つてしまつた。あ、そこに見るべからざる断髪美婦の立小便せるに去くわす。即ち口を歪めて味やく「見ろ！やつぱりモーターとは感覚のことだぞ……」

▲爾見子女史くしやみすること甚だ憂なり。寒く夏に加はる。七子氏遙かにLINEERSより書きて寄せて同人の寝静を戒む。

▲田園詩人鉄弥氏、沈思草を和ること久し。大作を待つ。

▲商店を経営する豚見氏、例によつてカナツチを振り上げて箱明けに大童子。これも商賣御繁盛とあれば結構。さるにマモシネ・シーズンとあつて夜は又そのうにいそいそしいとの話。

▲街頭詩人蘇南氏、砂糖をなめず糖尿病再発。パンと牛乳の外は嚴禁とは気の毒。

▲七子氏帰里の際一曲吹いたさりとんと角笛氏の名曲とさく事あたはず。どこでどうして御座るやら……

▲たて生氏、傑作と書き出さんと目下ヒギコモリ中。

▲庵光の立木すつかり丸坊主になる。

▲歌人のぶと氏、愛の子の首でうふる。「でも淋しい眺めじゃノウウ……」

▲美都三氏、一ヶ月たまった汚物の洗濯す。

▲誰がお坊に行つてやらうと云ふ方はありません

▲捨小舟氏、人生の無情を感じて坊主になると云

▲出し、仙骨老にコン／＼と意見する。

▲神庵氏、神託の整理す。令夫人之れを手傳つてマッヘマゴチヤ／＼にす。

▲月給をもらつた念然坊氏、バク廻りとしやれど、酒とやら一命を惜しまんや。ウイスキーの蓋をしきりと傾け、かつほれを唄ふ。

(左編)

〇係より

校書舞の辺で係り子ホフソ笑んでゐるが、S子B生、たぞぐれ生など、云つた名前が多い。まあ文名ふらい、ではなにかと云ふ向きもあるが、それにしても少ししたよりになる名前を発表して貰ふたい。それに本名もドミシリオもなく、ソッペラ棒にA子、B生、S子式ではとんとりつく島がはいと云ふもの。